

ともに 歩もう 石巻だより

2016年の秋号をお届けした後、長くご無沙汰申し上げました。ゆっくりと、でも、継続を心に誓い、ふたたび朝日新聞社員がつづります。大切な記憶を、確かな記録に。

女川から出発②

あの日は小学6年生。中学校で活動を始めた。「千年後の命を守るために」その担い手たちの今を追う。

阿部由季さん「宮城県職員」 出来ること、これからも

東北電力の女川原子力発電所を対岸に望む女川町南端の小さな

浜、小屋取に昨年8月、若者が集った。海上保安庁職員、サッカー選手、大学生…。町唯一の中学校、女川中の第1回卒業生たちだ。白布に覆われた石碑を囲む。除幕式が始まった。

保安庁職員の山下脩さんが司会する。脩さんから指名を受け、阿部由季さんが進み出た。浜に暮らす区長ら4人が見守る。直前の指名だ。言葉はその場で考えた。「お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます」といいます。

3月に石巻好文館高校を卒業し、県職員になった。学校事務に携わる。落ち着いた物腰にこの間の社会人経験がにじみでる。「皆様のご協力のおかげで、本日15基目の石碑をお披露目することができます」1基目は5年前、中学3年の秋に建立した。中学1年の社会科の授業で、学年全

員六十数人で津波対策を練り上げ、町内21カ所の浜すべてに教訓を刻んだ石碑を1基ずつ建てようと決めた。建てるたびに、その浜の人々を招き、除幕式を開く。「以前に比べて、会う機会が減り、思うように作業が進まないところではあります。自分たちに出来ることをこれからも精いっぱい頑張っていきますので、応援のほど、よろしくお願い致します」

区長たちと共に、中学1年の時に社会科を教えた阿部一彦先生も見守っている。現在は東松島市立矢本第二中の教頭だ。先生が大きな拍手を送る。区長たちも。ところが、由季さんは一彦先生と帰る道々、嘆息し、「つらいんです」。

県職員1年目の今、登米市に1人で暮らす。朝は5時に起床。7時半に栗原市の高校へ。生徒を支えたいと思った。自分が支えてもらったように。が、1年目は生徒と語らう余裕はない。書類作りに必死だ。卒業生たちは「女川1000年後のいのちを守る会」として活動を続けている。会長は由季さん。平日夜にLINEのグループ通話で会議を開く。仕事で疲れ切った会長は聞くだけ。言葉をはさむ気力は残っていない。8月は、心折れそうな時だった。

一彦先生は由季さんの前で、保安庁職員の前で水を見た。「楽しみは何ですか」。彼は心得顔で「ないですね」と即答。先生は続けて「何がうれしいの。日々が」「なんで続けているの」「思いで」11月の連休初日。由季さんは高校へ。職員室には教員もいる。先生は本当に大変だ。その日は、書類を作り終えると、心の中でひと声「よしっ」。達成感が芽生えた。

姉弟の話もしないように

慣れぬ仕事にくじけても、守る会は別。県内外へ散らばる会員に代わり、会長は休日、会の資料作りにこつこつと励む。あの春の中学校入学式。

新入生の大半は普段着姿。制服の由季さんは口を真一文字に結び、天井を仰いだ。家族も、家も、無事だった。個人面談で被災状況を問われた。うつむいたまま「…大丈夫です」。声が出ない。幼なじみにも聞かれた。彼女の家は全

明日の風

穏やかな口調だが、母たちの声は、強い雨音にも負けず、山すそに響く。「どれくらい距離か感じていただきたい」。傘を手に歩き出す彼女たちの背中を私は追う▼昨夏、石巻市の日和山を、「語り部」の2人、佐藤美香さんと西城江津子さんと歩いた。山すその旧門脇小学校脇の坂を上った先、100段の階段があがって山の上の幼稚園へ向かう▼「段差は約10センチで緩やかです。小学生も通学に使っていましたから」と佐藤さんが説明して上る。「ここを園児たちがあがれない訳はなく、私たちの方が…」と息を継ぐと、西城さんが「息切れが」と笑って続けた▼2人の娘はあの日、6歳。地震の時は幼稚園にいた。自宅は山を越えた内陸で、本来は地震から約20分後が発車時刻の内陸直行のバスで帰るはずだった。ところが――。地震から約15分後、海辺に住む子7人と共にバスに乗せられ、内陸とは反対側の海へ向かって山を下りた▼西城さんは地震後、海辺の勤務先を、

いた。母たちの声は、強い雨音にも負けず、山すそに響く。「どれくらい距離か感じていただきたい」。傘を手に歩き出す彼女たちの背中を私は追う▼昨夏、石巻市の日和山を、「語り部」の2人、佐藤美香さんと西城江津子さんと歩いた。山すその旧門脇小学校脇の坂を上った先、100段の階段があがって山の上の幼稚園へ向かう▼「段差は約10センチで緩やかです。小学生も通学に使っていましたから」と佐藤さんが説明して上る。「ここを園児たちがあがれない訳はなく、私たちの方が…」と息を継ぐと、西城さんが「息切れが」と笑って続けた▼2人の娘はあの日、6歳。地震の時は幼稚園にいた。自宅は山を越えた内陸で、本来は地震から約20分後が発車時刻の内陸直行のバスで帰るはずだった。ところが――。地震から約15分後、海辺に住む子7人と共にバスに乗せられ、内陸とは反対側の海へ向かって山を下りた▼西城さんは地震後、海辺の勤務先を、

壊だ。無事を伝えると「よかったねー」。笑顔も返ってきた。自分ならそう返せるか。ソフトボール部に入った。家族構成は聞かないよう、自分の姉弟の話もしないよう自ら心した。秋、先輩の2年生も、3年生も、家族を亡くしたことを人づてに聞いた。頼もしい姿しか見せない先輩たちだ。

2年生の夏。

一彦先生の授業で考えた津波対策の実行委員会が発足した。幼なじみの参加を知り、支えたいと加わった。

20人の委員は班に分かれた。由季さんは石碑作りを担う班で、班長に選ばれた。

一彦先生が角田市の石材店社長に引き合わせてくれた。石代は無償に、全21基を1千万円で引き受けてくれるという。

班員は口々に「募金で集めよう」「修学旅行でも募金を呼びかけよう」。そうなる」と報道陣が来る。先生は班長に託す。放課後も、休日も続く取材に、応じた。

3年生の夏。

1千万円達成。運動会で全校生徒約200人へ報告。拍手がわいた。

学年全員に募った案をもとに、班員全員の意見を求め、碑文を仕上げた。

休日、一彦先生の車で角田市の石材店へ通った。碑の制作を見学。先生はその年に気仙沼市へ転動していた。町出身ではない先生と一緒に町のことを考えてくれる。

3年生の秋。

国語の作文題に「希望」が出た。「私にとっての希望は大人です」とすぐに書き出した。一彦先生のことだ。

続けて「今はただひたすら背中を追っています。追いかけることしかできません」と記す。

そうして中学時代、土日も費やす活動を一度も休まずに取り組んだ実行委員は、ただ1人、由季さんだった。

高校進学後、推されて会長になった。

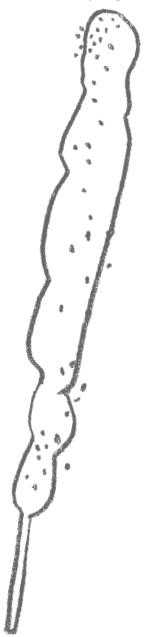
高校2年生の時にはこう語った。「この活動は、一人でも多くの命を救って、自分たちのような思いをさせないために。それには終わりは無い。いつまでも続けます」

自分に腹立つ。幻滅だ

中学3年生になる春の休日にこんなこともあった。高台の校庭で復興祭があり、朝から募金箱を手にした。夕方に母から電話。車で迎えに来る。待ち合わせは「鹿又屋があった所でね」と母。眼下に広大な更地。返す声が震えた。「どこかわかんなくなっちゃった……」。ショックだった。好きな街なのに、たった2年で忘れてしまっ自分が信じられない。腹が立つ。幻滅だ。

女川港北岸、宮ヶ崎で育った。

女川第二小学校に入学。1年生は1クラス。近所の同級生4人と通った。海沿いの国道に行く。女川橋のたもとの家では1階



の窓越しにニワトリが赤いトサカを立てて日光浴中。ランドセルを背負ったまま窓をコツコツたたいても、動じずに知らんぷり。

橋も、たもとの家も、流された。

冬。雪合戦を楽しみに登校。待ちきれず、通学路で雪玉が飛び交う。高台の学校までもうひと息、「がんばり坂」を駆け上がる。

坂も浸水し、周囲は一変した。

放課後。自転車15分先、町中心部の清水町の駄菓子屋へ。都会へ繰り出すような高揚感。お目当ては1本10円のきなこ棒だ。

駄菓子屋も姿を消した。

夏。女川港の北、赤灯台が立つ防波堤へ。小さな手で餌のアオイソメを器用につかむ。父と並んで釣り糸を垂らす。心躍る時間。

灯台も防波堤も消え去った。

保育所に通った頃は泣き虫だった。涙をふいて帰れば、近所のお年寄りが「また泣いていたの?」と優しく声をかけてくれた。

彼女は夫と家にとどまり、流された。

学齢期を迎えると、父から「女川橋を渡る前に地震が来たら家へ、渡った後は学校へ走れ」と再三言われた。父は1978年の宮城県沖地震を小学6年生で体験した。

あの日。由季さんは学校からさらに上へ避難する途中、坂の下に真っ黒な水を見た。

両親とも県職員。安否不明のまま日が過ぎる。4日後。玄関先に「ただいま」が聞こえた瞬間、駆け出し、父母の胸に飛び込んだことを、今も由季さんは覚えている。

車で出た。内陸の自宅へ帰る途中に園がある。次女の春音ちゃんを迎えに行く。道路は渋滞。地震から約45分後に到着。普段の倍以上かかる▼バスで出たと聞かされて、驚いた。が、ふもとの門脇小から「いま戻ってくる」とも聞かされた。学校脇の階段があがつてくるのだと思つて安心し、自宅の両親や夫へ電話をかけていた。長女と長男の無事も確認したかった▼実は違った。海辺を巡つたバスが門脇小で停車中、教諭2人が階段を下りてきて、運転手に園へ戻るよう伝えた。教諭2人は階段で戻る。バスは園児を乗せたまま渋滞道路へ▼約0.8キロ進んで被災。地震から約1時間後だった。園まで約0.3キロ。海辺の子は親たちに引き取られた後だ。内陸の子5人がバスに残され犠牲になった。運転手だけが園に戻ってきた。西城さんは初めて事情を知った。その後は切れ切れの記憶しかない▼今夏。歩いて知る。門脇小から園までは約270メートル。近い。すぐそこに母はいたのだ。待つていたのだ。

雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話が続けよう。

「第5回」

11日の朝「行つてきますは？」

澄んだ空が広がっていた。
昨年3月11日。

山すそにある雄勝病院の慰霊
碑前には、朝8時から病院職員
たち約10人が集まってきた。

転勤した看護師や、定年退職
した事務長。今も雄勝町に勤務
する職員はもういない。

線香と花を携えてきた。
記帳台の準備も始める。

慰霊碑も、事務長らがボラン
ティアの手を借り、病院跡地に
手弁当で建てたものだ。

碑には、入院患者40人を筆頭
に、病院職員24人の名前と年齢
も記されている。

山を背に、手を合わせ、目を
上げれば、碑の向こうで雄勝湾
が春の陽光に輝いている。

昼過ぎにちらついた雪は日差
しの中で姿を消した。真っ白な
雲が天空をゆつくりと横切る。

看護助手の永沼顕さんの父母
がやつてきた。

顕さんは、職員24人の中で最
年少の23歳だった。

穏やかな笑みを浮かべた事務
長が迎え、線香を手渡す。

臨床検査技師長の石井達也さ
んの家族も訪れた。主任薬剤師
の鈴木一男さんの家族も。

主任放射線技師の片倉満さん
の家族も来た。主任栄養士の
佐々木弘江さんの家族も。

入院患者40人のうち4人は今
も行方がわからず、職員24人の
うち、片倉満さんと佐々木弘江
さんら9人も帰らぬまま。

午後2時46分。防災無線の長
いサイレンが二帯を包んだ。

碑を囲んでいた家族は、海へ
向かつて目を閉じる。

その後。
帰っていく家族を見送り、事
務長たちは残った。

午後3時半。3階建て病院の
屋上に海が達した時刻が来る。

事務長たち職員は、碑の傍ら
でふたたび祈った。

7年前のあの日の朝。
青空の下、道端に残る前夜の
雪は真っ白に光っていた。

雄勝港から約2キロ内陸、味
噌作に佐々木弘江さんの家があ
った。2000年建築。木造2
階建て。建坪は約50坪。一帯は

618世帯1668人が暮らす
雄勝町中心街だった。

前夜、弘江さんは次女と長男
と就寝。かれこれ1カ月、夫と
は別の寝室だ。大手術を受けた
のに静養せず無理を重ねる夫に
すっかり立腹。家族の健康に心
を砕く弘江さんのこの手の怒り
はなかなか収まらない。

午前7時。布団にくるまって
いた次女の花菜さんは、母に起
こされた。雄勝中学校の1年生。
13歳になったばかりだ。

その朝の献立は何だったか。
覚えていない。

いつも通りの朝だったから。
母は毎朝必ず食べさせる。遅
刻寸前ならコーンポタージュに
ご飯を入れて。一度だけ母も寝
過ごした朝はホットケーキ。大
抵は前夜の残りのステーキ野
菜に、マヨネーズであえた卵を
のせたパンか、ご飯と味噌汁と、
長女には目玉焼き、目玉焼きの
白身の焦げ目が苦手な花菜さん
にはスクランブルエ
ッグを作る。

娘2人の食事の
後、母は、4歳の長
男大輔君を抱き上

げて連れて来て、父と食卓につ
く。

7時50分、花菜さんが家を出
る。黙って行こうとするのを母
が大きな声で引き留めた。

「行つてきますは？」

家から小さな川沿いの道を港
へ向かつて20分ほど歩くと、雄
勝中だ。3階建て校舎も山を背
負うようにして立っている。

花菜さんが着く頃、長女の春
香さんも雄勝中へ向かった。

その日が卒業式だ。
友人と待ち合わせて、いつも
の通学路を一緒に行く。

もう1人の友人が先を行く姿
が、視界に入った。

2人は走って追いかけた。
「これが最後だね」

そう言いながら、道々、3人
で写真を撮って歩いていった。

『雄勝町史』は、1964年
7月の雄勝中の生徒数を470
人と記録している。町内には当
時、雄勝中のほかに船越中と大
須中があり、それぞれの生徒数

は218人と175人。
82年4月に船越中は
雄勝中に統合された。

2010年度、雄勝中
の生徒数は77人、大須

勉強しないことを叱られた後
でささやかな反抗を続けるも、
挨拶しないことには母はもつと
厳しい。「行つてきます」。低い
声で言い残し、白い息を吐きな
がら歩き始めた。

中は20人まで減っていた。
10年度の雄勝中の卒業生は29
人だった。

体育館で行われた卒業式。
春香さんは感涙にむせんでい
た。斜め前に立った花菜さんは

「泣き顔がキモイから泣かない
で」とささやいた。春香さんは
「うるさい」と切り返し、目を
潤ませて感動にひたっていた。

共働きの両親は、半日休暇を
取って来てくれた。

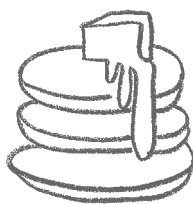
父の勇人さんはビデオをまわ
していた。

29人の卒業証書授与は、ほど
なく終わった。

その後、3年生一人ひとりが
保護者へ花と手紙を渡す。

春香さんが目を向けると、母
の弘江さんは号泣していた。
驚きつつ、赤いバラ1輪と手
紙を母へ差し出し、少し照れな
がら言った。

「これからもよろしく」
その手紙は、受験前の授業中
に書いた。志望校は石巻地へ



女川町議会 福島を視察⑩

核のごみ最終処分は先送り

女川町議会は2014年夏に東京電力福島第一原発事故の被災地・福島県浪江町を視察した。女川の被災直後の夏のような光景は町議らの胸を突いた。昨春、視察団に対応した当時の浪江町議会議長小黒敬三氏(62)の案内で私は避難指示解除後の町を訪ねた。前回に続いて記す。

JR浪江駅前。浪江一小高間の常磐線運行が再開して1カ月経つが、人通りはない。駐車中のタクシーを見て「空気を運んでいる感じだね……」と小黒氏。地震で損壊した建物もそのまま残る。「解除ですぐ戻れる訳ではない。家屋の修理もある。医療、介護の施設も要る」

浪江東中学校は改修中。校庭では認定こども園の木造園舎を建設中だった。30人の子を受け入れるという。が、若い世代が帰ってくるのか。小黒氏はいぶかる。

役場へ。14年当時、1階のカウンターの表示は「帰町準備室」だった。現在は「住民課」「住宅水道課」にかわる。昼時に年配の男性1人が訪れていた。

震災時、町議会は全員協議会開催中で小黒氏は4階の会議室にいた。窓の外を見ようとしたら、重い二重ガラスが激震で左右に揺れ、押さえようとした左手がバチンとはさまれた痛みを覚えている。

昨年5月1日に訪ねた時は、その窓から望んだ山に煙が立ちこめる。山火事だ。帰還困難区域で消火にてこずる。上空のヘリをにらみ、小黒氏は「初期段階で消防団100人で一斉に防火帯を作ればすぐ消せるんだけど」。12日間かけて鎮火した。

11年3月11日は長い揺れの最中、窓の外、周囲の山のなだらかな尾根沿いに煙が上がっていた。火事ではない。土ほこりだと後で気づいた。地震後は、役場の断水に対応。水道工事は家業で心得がある。停電に、屋上の自家発電も起動させた。が、軽油を送り込むポンプの電源が、非常用電源になっていなかった。設計ミスだ。若手職員らに屋上まで軽油を運ばせた。

12日早朝、テレビニュースで国が10キロ圏内に避難指示を出したことを知り、町は町内の30キロ内陸へ避難を決定。「搜索と復旧に備えて町内がいいと考えていた。東京電力の情報が多かったから」と振り返る。小黒氏自身は避難所用の暖房器具や発電機を自衛隊車両に積んで送り出し、いったん帰宅した。

子どもたちの未来を先食い

自宅にいた午後3時36分。ドンと下から突き上げるような腹の底に響く鈍い音に爆発を察知した。1号機の原子炉建屋の水素爆発だった。家族は避難した後だ。近所に「爆発したみたいだから逃げろ」と呼びかけた。冷静さは失わなかった。

青空に伸びる灰色の雲を見た。うろこを描くように膨らんだキノコ雲を目に焼き付けた。ただ、その時も、これほど避難生活が長期化するとは思ってもせず、放射能汚染自体、考えもしなかった。

12日夕方、小黒氏も30キロ内陸に到着。警察官は防護服姿だ。「住民が不安になるから脱がせろ」と抗議した。「我々も浪江(中心部)に行く用事がある。着替えると時間がかかる」とかわされたという。

14日夜、隣接する葛尾村の防災無線放送が届いた。村の避難開始を知り、動揺が広がる。日中、二本松市へ病人を送り届けた小黒氏は、同市に避難者が集中していないことを町幹部に伝えた。15日朝、同市へ避難し、以来、7年を過ごす。

小黒氏は15年11月の町長選に出馬し、破れた。投票率は56・05%。震災前07年の投票率73・51%から大きく落ち込んだ。

浪江町の昨年3月策定の復興計画にはこう書かれている。「再事故発生時の避難方策等の充実に取り組みます」。今の町の暮らしには、福島第一原発の「再事故」を念頭に置くことが欠かせない。

廃炉完了の時期は不明だ。そのことを小黒氏に尋ねると、逆に問われた。

「それより最終処分場はどうなったの」

原子炉で溶け落ちた燃料デブリを取り出す前に、一体、核のごみはどうするのか。その問題を先送りすることは「子どもたちの未来を先食いしているだけ。私たちに未来を先食いする権利はあるのか」。

浪江町議会は11年12月に福島県内の原発全基の廃炉を求める決議をした。女川町議会の木村公雄議長は浪江町の視察後、「原発なしに町が生きていけるか、その答えが欲しい」と吐露した。同じ問いを投げかける私に小黒氏は「答えは全国にある。原発のない自治体は全国にいくらでもある」。こんなたとえ話を出す。子象を杭につなぐと、大きくなった時、杭があるだけで逃げなくなる。「そういう思い込みで選択の幅をなくしているのかな。一步踏み出せば選択はいくらでもある」

域の最難関校、石巻高校。父からは受験前に「志望校を変えたほうがいいんじゃないか。このままじゃあ厳しい」と言われた。悔しくて泣いているところを母に見られた。母は言った。「泣かないで頑張りなさい」入試は卒業式の2日前。合格発表は12日後の23日だが、受験

謝を手紙に記した。その入試の日。母さんの言葉があったから、ここまで頑張れた。母への感謝を手に記した。



昼前に地震があった。石巻市は震度4。断続的に余震があった。春香さんが目を上げると、試験監督の職員は動じずに本に目を落としていた。は動じずして数人の職員が試験会場へ入ってきて、黒板に貼

り紙をした。「試験時間を30秒延長します」心の中でつぶやいた。(30秒。かわんなくねえ?)理科が難しかった。数学の証明が解けなかった。試験終了時に思った。(ああ、だめだ……)その日、県内では試験時間を10分間延長した高校もあった。

帰り道、春香さんは父と一緒に携帯電話を買いに行った。「卒業式にはどうしても間に合わせたい」と頼み込んでいた両親からの15歳の誕生日プレゼントでもある。その場で登録したアドレスは二つ。登録名は「お父さん」と「お母さん」。